

「遺伝子組換え食品の安全性評価基準案作成にあたっての意見」

NPO 法人 日本子孫基金 遠藤諭子

■消費者が不安に思うのはなぜか

1. 遺伝子を人為的に組換えるという、自然の摂理に反することが及ぼす影響が未知であるから
2. それを食することが及ぼす影響が未知であるから
3. 環境に及ぼす影響が未知であるから
4. それらの影響が悪影響であった場合の責任の所在が明らかでないから

■問題点

「遺伝子組換え」と「非組み換え」の分別の徹底が不可能である

→よって、混入は避けられない。

1. それは何を意味するかということ、消費者の選択の余地がないということ。「非組み換え」であると消費者が信じて食べていても、実際には「組換え」が含まれていることもある。また、今後、消費者メリットをうたう「組換え」食品を販売したいとする企業が出てくるであろうが、それらの製品も100%「組換え」を原料としたものかはわからない。

2. 混入による環境汚染、そしてそれが生み出すさらなる混入の悪循環。

国全体の政策の矛盾

1. 「有機栽培」など、自然にやさしい農法を国が支援する一方で、遺伝子組換え食品という、まったく逆のものも推進している。矛盾しているのではないか。「有機栽培」と「遺伝子組換え技術」が共存できないことは諸外国の例で明らかである。

2. 低い自給率を上げるには、輸入品との差別化が必要であり、「非組換え」に徹する必要があるのではないか。

3. 国民の健康を守るためには、長年の栽培・食経験から安全性が確認されている「非組換え」を推進するべきではないのか。

4. いま、盛んに叫ばれている「食育」には、本物の食品をまず知ることが必要だが、遺伝子組換え食品を食しては、本物が何かわからなくなる。

■安全性評価基準の基本は、コーデックス（国際食品規格）委員会で合意されたガイドラインになると思われるが、それ以外で安全性評価基準に盛り込むべきだと思う事項

予防原則

消費者の不安の理由でもある未知の影響、そして現在起こっている混入の問題、また、国全体の政策などを考慮し、予防原則的措置を取る旨。

全ての遺伝子配列のチェック

アレルギー物質や、その他の有害物質の発生の有無を調べる上で、組換えた遺伝子とその周辺部分だけでなく、すべての遺伝子配列を調べるべきである。

抗生物質耐性マーカ―遺伝子を含む食品は許可しない

抗生物質耐性マーカ―遺伝子を含む食品は、国民の健康に多大な影響を与える可能性がある。ノルウェーのように許可しないべきである。

長期にわたる疫学的調査の義務付け

長期にわたる疫学的調査をしなければ、本当の安全性はわからない。よって、長期にわたる疫学的調査で問題がないとされない限り、安全であると評価すべきでない。